校内別室での指導について

不登校児童の状況

対象児童は、第４学年後半より登校しぶりが見られるようになり、第５学年から不登校となった。１度は不登校となったが、校内別室を開室したことにより再度、登校できるようになった。現在は、不定期に登校した際に利用している。支援員や他の利用児童ともゲーム等を通して人間関係を築き、他者ともコミュニケーションが取れるようになってきている。

具体的な取組

○面談等

支援員が保護者と合意形成を図り、一日の時間の過ごし方を毎日決めてから活動している。

養護教諭とＳＣ、支援員との面談を週１日ずつ行っている。

○関係機関との連携

巡回心理士が児童の様子を見取り、教職員は、専門的な助言を受けている。

フリースクールに通う児童の出席状況について、学級担任と支援員が月１回情報交換を行っている。

○一人１台端末の活用

一人１台端末を利用し、教室内の授業をオンラインでつないで学ぶ機会を設けている。

学級内での意見交換についても、タブレット端末を用いて参加できる環境を整備している。

教室内の板書をタブレット端末で撮影し、当該児童が別室で記録している。

○情報共有

児童の変化やその様子について、各担任と保護者とが把握できるよう、記録用紙内の伝達内容の精選と電子化について検討している。

別室利用者の保護者同士が互いの悩みを共有し合えるよう、定期的に情報共有の場を設けている。

不登校対策委員会を月１回行い、入室に係る課題や、通常学級への参加の仕方、学習内容や方法について様々な立場から意見交換している。

成果

１階に別室を設置し、支援員が常駐することで、登校しやすく、児童にとって教室以外の安心できる居場所になっている。

支援員が児童に寄り添った支援を行うことで、各自のペースで学習することができている。

児童ごとに支援ファイルを作成したことで、支援員と担任、管理職と連携が取りやすくなっている。

課題

教室での活動を促すタイミングや、複数の児童が別室を利用しているため、支援員が教室への付き添い等で不在の際の、他の児童への対応が課題である。

生徒・保護者への居場所の提供について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校時代から継続して登校がままならない。SC や SSW も支援し、情報共有して、夏休み前に校内別室につながった。10 月から毎週曜日を決め継続して登校できるようになった。今は振り返りの対話、学年の教員が空き授業に別室を訪れ対話や調べ学習、小集団で社会性の基礎づくりなどを行っている。

具体的な取組

【支援の合い言葉は“よくきたね！”】

週１回登校できるようになった生徒、継続登校している生徒、教室復帰し始めている生徒などがいるため、登校できたことを価値付け、“よくきたね！”と声かけを継続している。承認の声かけを続けることで、生徒同士でも認め合う環境が醸成されている。

【教職員や保護者と”つなぐ”サポート】

生徒が別室登校できた日には担任・学年をはじめ教職員が顔を出せるよう声かけをし、一緒に給食を取りに行ったり、保護者と連携を図ったりして、支援をできるようにしている。声をかけることを大切にすることで教職員の来室の機会が増え、当該生徒とつながることができている。

【指導員とボランティアのチーム支援】

生徒と触れあってみたい、将来学校で教員として働きたい、という意向のある大学生や本校の卒業生に、ボランティアとしてサポートしてもらっている。毎日いてくれる指導員の存在と、年齢の近い学生との対話で、生徒の活動の幅が広がっている。

【社会性や意欲を一歩育む練習の場】

不登校が継続している生徒の中には、家族以外との関わりがなく、対話が苦手、目標が立てられず生活に意欲が持てない等の生徒もいる。支援員が一緒に季節の飾りを作りながら、花の植え替えをしながら、部屋で作業し、コミュニケーションを図り、人と関わるようにしている。

成果

開室してから１年間で継続して登校できる生徒もおり、不登校生徒の居場所の一つとして定着してきている。また、別室から教室復帰できる生徒も複数名います。これからも生徒たちに寄り添いながら支援を続けていきたいく。

課題

登校につながっていない生徒がいるため、個別にアセスメントしながら居場所をつくっていくことが課題である。

校内別室指導支援員の取り組みについて～個を尊重した居場所づくり～

不登校生徒の状況

対象生徒は、教室に入れない、教室にて継続的に授業を受けることに困難さを抱えている。集団行動が苦手で、起立性調節障害等により決まった時間に登校することが難しい、小学校から長期にわたって不登校だったため、校内別室に登校している。

具体的な取組

○別室での自習支援

各自がもち寄った課題を中心に、学習支援を行っている。一人一人に合った方法で寄り添っている。

○ＳＳＷなど専門機関との連携

当該生徒に対しての支援を行うため、週１回の支援会議にＳＣも参加している。また、ＳＳＷや巡回教員による家庭訪問を通し、当該生徒の変容や保護者の情報の共有を図っている。さらに、外部機関と連携し、多方面からの対応と生徒理解を深めている。

○絆づくり

校内別室に登校する生徒だけでなく、普段から校内で生徒の様子を観察し、気になる生徒とコミュニケーションを図り、不登校の未然防止に努めている。

○進路相談

３年生に対しては、進路に向けた相談について、常に担任と情報を共有し連絡を取り合っている。

また、受験を目標に、作文や面接の模擬練習などを通して自己表現力や社会性を高めることに取り組んでいる。

成果

自分のペースで別室登校をすることにより、生徒たちは生活習慣を確立し、自分の居場所を確保できている。また、継続的に大人や仲間が関わることで信頼関係を築くことができ、安心して学校生活を送れている。

課題

・支援員の人材確保
・支援員との綿密な連携と共通理解
・組織的な対応
・保護者や地域への周知

校内別室指導支援員の別室や教室でのアプローチについて

不登校児童の状況

対象児童は、給食を食べる量が少ないので、まわりの児童からもっと食べた方がよいのではないかと心配されることが気になり、教室で給食を食べられなくなった。

具体的な取組

○一人になる場所としての利用

集団生活が苦手で、家庭でも居場所がなく、一人で過ごす時間が増えていた。登校する場合、教室に入れない時は別室で、一人で過ごし、誰にも話しかけらない時間を学校で確保することによって、登校日数が増え、教室に戻る時間も増えてきた。支援員は話しかけず、見守るようにした。

○特定の教科のみ利用

体育や音楽、図工、家庭など特定の教科のみ利用し、他の教科では教室に戻った。担任は、保護者や校内別室指導支援員とあらかじめ話し合い、保護者に了承を得た上で、担任と当該児童がどの教科を別室で過ごすのか、事前に話し合って利用した。担任に話をせずに勝手に児童の判断だけにならないように留意した。

○別室の利用

教室に入れない時は、別室に保護者と共に登校し、当該児童と保護者、支援員の三者で話し、支援員との信頼関係を築き、支援員と学習に取り組んだ。

○教室での見守り

児童と支援員で教室に行き、支援員が教室にいることで児童の安心感が増した。別室と教室を行き来し、教室にいる時間が増えた。

成果

別室で給食を支援員と食べることになり、安心して給食を食べることができた。3 か月ほどで教室に戻った。別室だけでなく教室でも見守ることや別室で一緒にいても話しかけず当該児童が取り組みたい活動ができるように支援していくことも大切だということが分かった。

課題

校内別室は、週 3 日 6 時間の開室を週 5 日、毎日開室することになり、安心して利用できる児童を更に増やしていく必要がある。

校内別室の活用について

不登校児童の状況

対象児童は完璧主義のためこだわりが強く、失敗に対する不安が強い。また、複雑な家庭環境のため、登校することが難しい。進級を機に登校開始を試みたが、本人が拒み登校できなかった。不登校の間、当該児童の生活リズムが乱れていた。

具体的な取組

○安心できる空間と仲間

長机とソファを教室の中央に置くことで、休養したり、他の児童と交流したり、支援員と相談したりする空間として活用している。管理職や担任･専科等の多くの教員が来室し、この空間を活用している。

○遊びを通したコミュニケーション

エデュテインメントツールやカードゲームなどを活用し、支援員のサポートを受けながら、自分たちで話し合ってルールをつくり、楽しんでいる。遊びを通して児童相互のコミュニケーションのよい機会になっている。

○体を動かしてストレス発散

室内にトランポリンを設置している。体を動かすことで体力の維持や気持ちの安定に役立てている。また､「もっと体を動かしたい」という動機付けにもなり、休み時間に校庭へ遊びに行く児童が増えた。

○習熟度に応じた自主学習

東京ベーシック・ドリル等を活用し、児童と相談しながら習熟度に応じた自主学習に取り組んでいる。毎日児童が自分で計画を立て、内容を決めている。取り組んだものはファイリングし、毎日学級担任が確認している。

成果

現在､約 10 人の児童が校内別室教室を利用している。何か月も登校しなかった児童が､毎日別室に登校するようになり､生活習慣が整った。また､特定の教科や行事に参加したり､進学へ意識が向いたりと､多くの児童の意欲の向上を図ることができた。

課題

利用児童が増えることで教室が狭くなっている。状況が児童によって違うため、支援員の増員や複数教室の確保が課題である。

校内別室指導支援員による温かい居場所の提供

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校１年生の夏休み明けから不登校状態が継続している。中学入学後、部活動や勉強に一生懸命取り組んでいたが、良い結果を出さなくてはという過度の不安や恐怖が心身の負担となって不登校となった。保護者や関係機関と連携し、登校刺激は行わずに見守り寄り添いながら、当該生徒の意思を尊重している。

具体的な取組

○居場所づくり

校内別室を使用する生徒の状況にあった、安心・安全に過ごせる空間を作るため、机の配置やパーティションの位置の工夫、季節の装飾を行った。温かい空間を作ることで、生徒が支援員と話しやすくなり、寄り添いながら活動を見守ることができた。

○個々の不登校生徒への支援

校内別室に登校した生徒一人一人に応じた個別活動のサポートを行った。下校時の見送り、給食を取りに行くこと、プリント類の整理、様々な機会を活用した教室への移動サポートなどにより、生徒の心情に寄り添い、「また、学校に行ってもよいな」と思うような声かけや温かい雰囲気づくりを心がけている。

○情報共有シート

支援員は、生徒の活動内容、生徒の校内別室での様子や会話の内容、保護者の様子等、様々な情報を日誌に毎日記録し、情報共有を行っている。日誌に書かれている内容は、生徒の現状分析、担任との関係づくり、今後の支援方針を決めるために活用している。

○デジタル機器を活用した支援

教室等に入ることへの抵抗感を軽減するために別室と教室をオンラインでつないだ。生徒個々の状況に応じ、授業の他に休み時間や給食もつなぎ、教室の様子が分かるようにした。学級の友人と関わることができるよう、マイク機能を活用し、他の生徒と対話できる機会を設けた。

成果

当該生徒は、校内別室での支援開始後、登校できる日数が徐々に増えた。生徒のペースに合わせた細かいサポートによって、校内別室が居心地のよい場所となり、支援員が担任と連携することで、当該生徒と在籍学級の他の生徒が関われる場面の創出につながった。

課題

職員室と校内別室の連絡・調整を円滑にするために、マニュアルの明確化が今後も必要である。

生徒ができることから始める支援

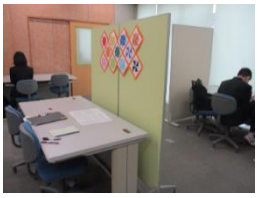
不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校入学後に欠席が目立つようになり、中学校１年生の夏休み以降から長期の不登校になる。当該生徒は周囲の目を極端に気にする傾向がある。幼少期から祖母を中心に育てられている。

具体的な取組

○別室での自習支援

各自が課題をもち寄って行う自習の支援を行っている。分からない部分は、生徒が支援員や不登校対応巡回教員へ質問し、学習を進めている。



○保健室との連携

別室だけでなく、保健室でも補助的に、不登校生徒を受け入れている。養護教諭にいつでも相談ができるようにしている。

○支援員・巡回教員による相談活動

連絡ノートを活用し、支援員と担任との情報交換を深め、生徒について共通理解を図っている。中学校３年生には、担任・学年教員と連携し、受験を目標とした面接の模擬練習を行い、コミュニケーション能力、自己表現、社会性の定着などを図っている。

○地域人材を生かした放課後活動

今後、近隣の大学の学生ボランティアによる学習支援を行う。また、子ども食堂との連携により、学校での様子と地域からの蓄積された情報について相互に共有し、支援に生かしていけるようにする。

成果

結果的には目標としていた修学旅行など行事への参加は果たせなかったが、意欲的に準備を進めていた。定期的な登校も定着してきており、保護者との関わりや進路についての会話をはじめ、コミュニケーションが取れるようになってきた。

課題

対人関係では、個別の対応には慣れてきているため、段階的に小集団へ順応できる力を身に付けるようにしていく。

居場所の提供について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校３年生から集団に入れない状況になり、不登校になった。中学校入学時に特別支援学級に所属した。教職員とのコミュニケーションには支障がないが、極端に周囲の友達を気にするため教室に入れない。保護者は当該生徒の意思を尊重し、別室での登校を希望している。

具体的な取組

○別室での学習支援

各自が課題をもち寄って行う自習の支援をしている。活動の記録ノートを作成し、当該生徒についての支援員相互と教職員の情報共有を図っている。

○地域人材力の活用

子ども食堂と連携し、学校・地域相互の情報交換と支援を計画している。具体的には、登校ができない生徒の小学校時代からの状況や家庭環境などについての聞き取りを踏まえた保護者への連絡、地域からの呼びかけなど、家庭への学校内外から連携を図っている。

○人間関係づくり

コミュニケーション能力の育成のため、別室への参加生徒が少ない場合には、当該生徒と支援員相互の会話や発言を促すカードゲームなどを通して、自分の気持ちを表現できる活動を行っている。

○外部機関との連携

別室支援員と担任との情報交換のほか、週１回の支援会議に SSW が参加し、当該生徒・保護者の状況についての情報を共有して、対応を進めている。外部機関と連携し、多方面からの生徒理解と当該生徒・保護者への対応を深めている。

成果

夏休み明けからの別室開室だったことがあり、当該生徒の別室への参加が安定しない時はあったが、支援員との関わりを通して、別室を利用できるようになった。

課題

入学前から対象となりそうな生徒・保護者に対して、別室の存在の周知方法を検討する必要がある。

教室復帰を目指してまずは別室の１時間から

不登校生徒の状況

　対象生徒は、入学後、５月頃から体調不良による欠席が増えた。その背景には、家庭状況の変化があった。過敏性腸症候群診断を受けたため、まずは校内別室から教室復帰を目指すことにした。

具体的な取組

○別室での学習の見守り支援

　別室支援員により学習を見守り、個別支援をする。日誌を通した活動の振り返りと担任との情報共有を行う。

○保健室との連携

　登校時に、養護教諭による相談及び健康観察を行う。当該生徒の自己評価による毎日の振り返りを確認する。

○SSW や関係機関との連携

　週１回の支援会議にＳＳＷ・ＳＣが参加し、教職員と共に情報の共有を行っている。また、外部の専門機関と連携し、当該生徒の内的・外的な変容や家庭の状況などについての理解を深め、当該生徒・保護者に対して、より的確な対応ができるよう図っている。

○支援員との関係づくり・運動の推進

　給食後に、支援員と共に、体を動かす時間を設けている。

成果

　当該生徒が目標と予定を決定するようにして、スモールステップで実行してきた。達成感と自己肯定感が高まったため、別室登校の時間が増えてきている。行事も後方から見学ができるようになった。

課題

　「やれない」ことと「やりたくない」ことの見取りを行い、実態を踏まえた支援になるようにしていく必要がある。

自分のできるところからチャレンジしよう

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校入学当初は姉の同伴により登校できていたが、少しずつ欠席が目立つようになり、登校しても教室には入れなくなり不登校となった。保護者は行事に参加させたい意思をもっている。

具体的な取組

○別室での学習支援・相談

各自が持ち寄った課題に取り組めるよう支援をしている。利用生徒はそれぞれ、その日に自身が決めた課題に取り組んでいる。

○定期的な家庭訪問・登校支援

不登校の生徒に対して、担任からの定期的な家庭連絡とともに、週１日の巡回教員による生徒の安否確認を兼ねた家庭訪問を行っている。別室までの登校支援により、現在は定期的な登校が可能となっている。

○継続した家庭へのアプローチ

家庭との連絡をより深めるために、担任からの定期的な連絡を基に、巡回教員による定期的な家庭訪問を通して、学校と家庭との相互の情報交換を深めている。今後も、家庭とつながり続けるように学校からの関わりを継続していく。

○生徒間の人間関係づくり

生徒同士の交流とコミュニケーション能力の育成を図るため、生徒たちの企画による活動を実施している。

成果

巡回教員が登校支援できる週１日の別室登校が定着化してきた。当該生徒は、教室での活動までには至っていないが、体育祭や宿泊学習などの主な行事には参加できるようになった。

課題

全ての不登校の生徒の状況に応じて、学校とつながることができるよう支援していく必要がある。